

第三百四十一回 青葉会

平成二十六年八月二十八日(木)

午後六時〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

福島正明 山内天牛

〈投句〉

後藤保明 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也

渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 川口孤舟 楠田彦十 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子
村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

兄若き軍衣の遺影敗戦日 万里子 (弘・ゆ・灯・隆・允・く)

みんみんを数へゆく父子旅の朝 全 (そ・忠)

鍵探しぶつかつてくる真夜(まよ)の蝉 全 (そ)

墓を掃き水引草の種まみれ 全 (三)

みんみんとみんなも歌ひ遺影笑む 全 (そ)

耐へがたきを今も耐へゐて敗戦忌 恵洲 (猛・恭・忠・孤・敏・正・青)

ラムネ玉取り出せぬまま老いにけり 全 (忠・彦・弘・ゆ・正・啓)

筋書のなき人生や浮いて来い 昇 (紀・恭・孤・弘・允・啓)

(孤…類句数多と思うが、「浮いて来い」がよい) (下五が季語)

☆里の盆寺の娘は住職に 忠彦 (万・孤・龍・隆・天)

花火果て巷の音のよみがえる そらお (龍・敏・允・正)

帰つたと喜ぶ親なく帰省かな 忠彦 (猛・恭・ゆ・隆)

町の灯の眼下に涼し小屋泊り 一灯 (堅・弘・青・天)

(青…「町の灯を」が良いかも)

太つたね毎年言われる夏が嫌 啓子 (猛・弘・允・青)

(青…「太つたねと毎年言はれ夏が嫌」の方がすつきりすると思うが…)

新涼や古書肆の軒で端本買ふ 亜也 (孤・龍・灯・三)

☆初秋刀魚腸(わた)を妻よりもらいけり そらお (万・隆・天)

精一杯命つながむ蝉しぐれ 猛 (堅・そ・恭)

飼い猫が煙たかろうと蚊遣り消し 保明 (猛・正・啓)

山霧に川霧湧き出づ飛驒の谷 ゆたか (堅・紀・三)

(☆…湧き出づ↓湧けり)

揺り上ぐるザツクの重し霧雫 一灯 (孤・く・青)

(青…特選です。霧雫がいい)

☆修司なき鳴き砂の浜海霧(じり)しぐれ 全 (万・孤・彦)

☆襪着く暮るる遠嶺やそばの花 全 (万・猛・允)

☆松風を復習(さし)ふ夜半の露しぐれ 正明 (龍・啓・三)

☆向日葵の右向け右に咲き並ぶ 昇 (恭・ゆ・く)

☆向日葵も供花に交じりて句友逝く 天牛 (万・忠・敏)

☆列島の猛暑を冷やす豪雨かな そらお (万・允)

☆夕顔や癌才(ナニ)の数度(ナニ)の友快気 紀久男 (忠・敏)

☆児雷也のねぶたの蝦蟇(ひき)に睨まれる 忠彦 (彦・灯)

☆祭夜のエレキ奏者も老ひにけり 全 (猛・敏)

☆竿灯を見上ぐ子等の眼輝けり 保明 (堅・龍)

(☆…中七↓見上ぐる子らの)

☆芳(いたむ)しや戻り竿灯傾(かぶ)きおり 全 (灯・く)

老犬の足先に止む鉦叩

弘子 (灯・三)

☆急ぎ足を立ち止まらせし赤とんぼ

(☆…上五↓急く足を)

夏料理女主人の気つ風よく

(どぜう鍋を取えて夏料理にした由。飯田屋女将)

☆秋ともし年輪刻みし妻の影

(☆…上五は漢字にするかOR秋の灯や)

「狐忠信」

海老蔵のまなこ鬼気帯び涼新た

貝殻の耳輪吹かるるあいの風

(能登。西から東に吹く風)

シヤガールの空飛ぶ男女青野分

☆風涼し赤子の睫(まつげ)吹かれけり

(☆…上下終止形は改善すべし)

夏稽古竹刀弾かす大太鼓

飢じき日々風化の一途敗戦忌

遠花火話途中で耳すませ

品書きのおすすめ冬瓜(とうがん)絶賛す

灰色に街沈ませり秋霖雨

鳴き止むとみせ又始む法師蟬

我が墓に野の花見たり孟蘭盆会

入れ込みを避けて椅子席どぜう鍋

(駒形本店)

言付かる梨の重さよ神保町

殺されてゐるかに畑の捨て西瓜

高階にシンガポールスリングなど夏の果

(カクテル)

憂き世にも小さき満足今年米

☆川床や女将の親娘相似形

遠き日の父の麻服カンカン帽

山の宿秋日に梁の黒光り

子ら遊ぶ声消ゆ里やつくつくし

(☆…中七↓声消えし里)

ダイエントを括弧に入れてとろろ汁

新世界のメロデイライン大西日

☆切れば伸び咲いて散りての百日紅

おぞましきニユース溢れて夏暑し

他は知らず手づから剥かむ桃のみは

兜虫兒ら楽しませ大往生

七月に老いたるパン屋店仕舞ふ

万緑に蕪村俳画の白さかな

健介 (万・天)

恵洲 (正・天)

ゆたか (万・紀)

全 (紀・灯)

一灯 (龍・正)

正明 (紀・彦)

規雄 (万・そ)

天牛 (そ・く)

盛雄 (堅・紀)

そらお (ゆ)

紀久男 (天)

恭延 (敏)

全 (ゆ)

忠彦 (弘)

保明 (啓)

弘子 (彦)

全 (忠)

全 (紀)

健介 (堅)

堂哉 (万)

全 (天)

ゆたか (青)

全 (く)

正明 (青)

全 (隆)

啓子 (万)

全 (恭)

亜也 (紀)

天牛 (隆)

全 (彦)

盛雄 (三)

●次回青葉会

九月二十五日(木)

午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

十月二十三日(木)

平成二十六年八月句会報

一 今回は先生以下11名出席。投句9名。先生から寄贈の鯛焼(吉祥寺)とミニチョコ。弘子さんのドラ焼き「夕焼けだんだん」(根岸の竹陰庵岡楚)。正明さんの「小正謹醸・いも焼酎」(鹿児島)保明さんの秋田土産「高清水」:急用で投句されてから帰宅。忠彦さんの「太平山・一大巧」(秋田)、小生の「お福醸造・山古志」(新潟)。いずれも純米大吟醸と甘辛の名品が揃い、どんどんと飲んで食べて件の如しでした。御覧のように恵洲さん、昇さん、忠彦さんが高得点でした。話題は天牛さん正明さんが中心となつてハイデツガーのフランス語訳、堀口大学の名訳?等々活発でした。

二 関係者近詠

吟行へ樟若葉光る朝まだき 万里子 冷奴挨拶もなく友逝けり 規雄
 故郷には裏富士夏立つ表富士 全 「NHK俳句」九月号 宇多喜代子選
 追悼や開襟シャツの遺影壮し 全 風紋は駱駝のしとね夏の月 襄(孤舟)
 鳩囲み歌ふ雀ら御苑初夏 全 花道を静かに去る日星涼し 全
 庭あぢさる多様に女系四代へ 全 神酒ぐいと呷り祭の人となる 全
 教会史の末巻に我が名柿若葉 全 謂われなき御手討に遭ふごきかぶり 全
 学ぶ意味問はれつ答へソーダ水 全 カンダタとなりぶら下がる蜘蛛の糸 全
 無人てふ無為乗せ梅雨の観覧車 全 シナトラを聴く朝焼けのサンルーム 全
 看護師の笑顔に会ひに梅雨晴間 全 夕焼けの帆船集ふ入江かな 全
 一仕事終へ魚河岸の握鮓 全 「俳壇」九月号
 青天に描きし大画雲の峰 全 桜蕊降る禅寺の竹箒 孤舟
 永梅雨のカラオケ店に集ひけり 全 手斧目の残る板塀風薫る 全
 草屑一本くると回る夏の川 全 弘子 こんな夜は独酌がよし星涼し 全
 子を攫ひし鳥へ鳴く鳴く親雀 全 武蔵野の万緑回す水車かな 全
 サイダー缶ごとごと補充駅の朝 全 夏空の哭く詠訣のクラクシヨン 全
 墓地薄暑粋な年増にかしづきて 全 紀久男 「爽樹」九月号
 (青山の團十郎墓参)

「萬緑」九月号 一
 藪蕎麦の白玉しる粉江戸の味 天牛 夾竹桃日はかんかと空渡り 全 允章
 洪水の跡に子探す親の影 恭延 熊蟬の畳み掛くごとした鳴ける 全 全
 ぶちまけた万華鏡なり遠花火 猛 聖母像眼(まなこ)虚ろに長崎忌 全 恵洲
 晩夏惨西国襲ふ土石流 全 いつも吠ゆる犬の吠えざる暑さ哉 全 全
 咽ぶごと胡弓流るる風の盆 允章 齒の麻酔微かに残し冷奴 盛雄
 川風の匂ふてゐたる秋暑かな 全 儘ならぬこと二つ三つ夏の風邪 全 全
 故里は除染進まず花カンナ 青史 病棟は丘の上(え)にあり小鳥来る 全 全
 流灯会ちちはは恙なく闇へ 全 開け閉めの所作見事なる夏座敷 全 紀久男
 母の居た暗き厨の麦湯かな 彦十 癌才への友の根治を銀漢に 全 全
 蟬時雨深き眠りの淵で聴く 全 九歳の童と句作り山の避暑 全 健介
 勸九郎の「怪談乳房榎」 全 「きさらぎ句会」8月 全 健介

三 滝浴びる殺陣(たて)急テンポ大受けに 紀久男 昼の酒話題つぎつぎどぜう汁 紀久男

「俳句あるふあ」八―九月号瞥見
 高野ムツオのインタビュ(石寒太)と最新作。有馬朗人連載の「寺田寅彦随想」を興味深く読み、小生好みの「黛まどかの世界」に注目。自選100句より「てつぺんの星」(二〇一二年刊)の中から抄出してみました。

木挽町春の日傘を躲し合ひ 遙かより来て遙かへと秋日傘
 花道に男が消えて冴返る 革命記念日地下鉄を乗り継いで
 道行は女が先に鐘臈 読初のボードレールの怒りやう
 花冷や黒衣はいつも小走りに シャンゼリゼ一直線の寒さかな

平成二十六年九月十三日

紀久男記